－71, 2010.

4) 片山佳代子、岡本直幸：メッシュ法でみたがん罹患・死亡と社会経済的要因の関連. JACR Monograph 地域がん登録全国協議会. 16:75－76, 2010.

5) Miyagi Y, Higashiyama M, Gochi A, Okamoto N, et al.：Plasma free amino acid (PFAA) profiling of five kinds of cancer patients and its application for cancer detection. Cancer Research (投稿中)

2. 学会発表

1) 片山佳代子、岡本直幸：がんの相談支援に関する研究―神奈川がん臨床研究のがん電話相談内容の分析―. 21回日本疫学会. 札幌. 2010.1.

2) 片山佳代子、岡本直幸：がんのキャンサーサバイバーの調査研究―神奈川県における電話相談記録の分析. 第69回日本公衆衛生学会. 東京. 2010.10.

3) 斉藤杉子、上野世津子、市原智子、森田裕美、長江美有、小山佐恵、岩本佐代子、片山佳代子、岡本直幸：大型商店等で開催する保健事業参加者の体脂肪率、ＢＭＩの傾向について. 第69回日本公衆衛生学会. 東京. 2010. 10.

4) Okamoto N, Bando E, Saruki N, Imaizumi A, Yamamoto H, Mitsushima T, Yamakado M, Akaike M ： "AminoIndex", a novel screening marker based on plasma free amino acid profile, for colorectal cancer screening. 第69回日本癌学会. 大阪. 2010.9.

G. 知的財産権の出願・登録状況

１. 特許取得

なし

２. 実用新案登録

なし

３. その他

厚生労働科学研究費補助金（第３次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　金倉　譲　大阪大学大学院医学系研究科　血液・腫瘍内科学　教授

研究要旨
がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、造血器悪性腫瘍患者およびがん薬物療法担当医師を対象として実施した。対象施設は１２施設である。対象患者はそれらの施設で薬物療法を受ける造血器悪性腫瘍患者 500 人で、対象医師はそれらの施設で造血器悪性腫瘍の薬物治療を行う担当医師 50 人である。各々の医療機関の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した。結果については、現在研究代表者らが分析中である。

A.　研究目的

本研究では、造血器悪性腫瘍の患者のこれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用に関する調査を行った。

本研究から得られた成果は、わが国におけるがん診療の実態と、今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。

B.　研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、造血器悪性腫瘍患者を対象として実施した。

対象施設と調査票配布予定症例数は、大阪大学医学部附属病院　110 人、大阪府立成人病センター　50 人、住友病院　30 人、NTT 西日本大阪病院　10 人、大手前病院　50 人、市立芦屋病院　40 人、市立池田病院　30 人、市立吹田病院　30 人、市立豊中病院　50 人、箕面市立病院　10 人、市立伊丹病院　60 人、りんくう総合医療センター　30 人である。

使用調査票は、主任研究者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての感想や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010年9月より倫理委員会の認可を受けた施設において、入院・外来で配布する形で調査を実施中である。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認された。

C.　研究結果

2011 年 1 月現在、調査継続中である。また、調査結果については研究代表者らにより集計・分析中である。

D.　考察

わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が強く望まれている。しかし、自己負担の実態はよく知られていない。今回の調査結果は、がん薬物治療等、とりわけ長期的な負

担が問題とされる造血器悪性腫瘍の医療政策に反映することが期待される。

E. 結論

大阪大学医学部附属病院およびその関連施設で治療を受けている造血器悪性腫瘍患者500人と担当医師50人を対象として、がん薬物治療に関する実態等の調査を行った。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Ichii M, Oritani K, Yokota T, Zhang Q, Garrett KP, Kanakura Y, Kincade PW : The density of CD10 corresponds to commitment and progression in the human B lymphoid lineage. PLoS One. in press.

2) Tokunaga M, Ezoe S, Tanaka H, Satoh Y, Fukushima K, Matsui K, Shibata M, Tanimura A, Oritani K, Matsumura I, Kanakura Y : BCR-ABL but not JAK2 V617F inhibits erythropoiesis through the Ras signal by inducing $p21^{CIP1/WAF1}$. J Biol Chem. 285:31774-31782, 2010.

3) Ichii M, Oritani K, Yokota T, Schultz DC, Holter JL, Kanakura Y, Kincade PW : Stromal cell-free conditions favorable for human B lymphopoiesis in culture. J Immunol Methods. 359:47-55, 2010.

4) Nagai T, Takeuchi J, Dobashi N, Kanakura Y, Taniguchi S, Ezaki K, Nakaseko C, Hiraoka A, Okada M, Miyazaki Y, Motoji T, Higashihara M, Tsukamoto N, Kiyoi H, Nakao S, Shinagawa K, Ohno R, Naoe T, Ohnishi K, Usui N : Imatinib for newly diagnosed chronic-phase chronic myeloid leukemia: results of a prospective study in Japan. Int J Hematol. 92:111-117, 2010.

5) Wada N, Kohara M, Ikeda J, Hori Y, Fujita S, Okada M, Ogawa H, Sugiyama H, Fukuhara S, Kanamaru A, Hino M, Kanakura Y, Morii E, Aozasa K : Diffuse large B-cell lymphoma in the spinal epidural space: A study of the Osaka Lymphoma Study Group. Pathol Res Pract. 206:439-444, 2010.

6) Nakamichi N, Wada N, Kohara M, Fukuhara S, Sugiyama H, Ogawa H, Hino M, Kanamaru A, Kanakura Y, Morii E, Aozasa K : Polymorphous lymphoproliferative disorder : a clinico-pathological analysis. Virchows Arch. 456: 269-276, 2010.

7) Chihara T, Wada N, Kohara M, Matsui T, Masaya H, Maeda T, Shibayama H, Kanakura Y, Tani M, Morii E, Aozasa K : Peripheral T-cell lymphoma of Lennert type complicated by monoclonal proliferation of lrge B-cells. Pathol Res Pract. 206:185-190, 2010.

8) Nakaoka H, Sakata Y, Yamamoto M, Maeda T, Arita Y, Shioyama W, Nakaoka Y, Kanakura Y, Yamashita S, Komuro I, Yamauchi-Takihara K : Pulmonary hypertension associated with bone marrow transplantaion. J Cardiol cases. 2:23-27, 2010.

9) Arita Y, Sakata Y, Sudo T, Maeda T, Matsuoka K, Tamai K, Higuchi K, Shioyama W, Nakaoka Y, Kanakura Y, Yamauchi-Takihara K : The efficacy of tocilizumab in a patient with pulmonary arterial hypertension associated with Castleman's disease. Heart Vessels. 25:444-447, 2010.

2. 学会発表

1) Kanakura Y, Ohyashiki K, Shichishima T, Okamoto S, Ando K, Ninomiya H, Kawaguchi T, Nakao S, Nakakuma H, Nishimura J, Kinoshita T, Bedrosian C, Valentine ME, Ozawa K, Omine M : Fatigue and impared quality of life in patients with paroxysmal nocturnal hemoglobinuria (PNH) is associated with hemolysis, but not with anemia, 15th Congress of the European Hematology Association, Barcelona Miguel JS, Spain. 2010. 6

2) Tokunaga M, Ezoe S, Tanaka H, Satoh Y, Matsumura I, Kanakura Y : BCR-ABL but not JAK2 V617F inhibits erythropoiesis through the Ras signal by inducing $p21^{CIP1/WAF1}$, 15th Congress of the European Hematology Association, Barcelona, Miguel JS, Spain. 2010. 6.

3) Tanimura A, Tanaka H, Saito Y, Shibayama H, Matsumura I, Kanakura Y : Essential role of

an anti-apoptotic molecule Anamorsin for both intrinsic and extrinsic regulation of murine fetal liver hematopoiesis, 15th Congress of the European Hematology Association, Barcelona, Miguel JS, Spain. 2010.6.

4) Saito Y, Shibayama H, Tanaka H, Tanimura A, Matsumura I, Kanakura Y: A cell-death-defying factor, anamorsin, contributes cell growth through inactivation of p38MAPK, 15th Congress of the European Hematology Association, Barcelona, Miguel JS, Spain. 2010.6.

5) Satoh Y, Matsumura I, Harada H, Harada Y, Kanakura Y: C-terminal mutation of RUNX1 deteriorates DNA damage-repair response and promotes the development of AML, The 17th international RUNX workshop . Hiroshima, Japan. 2010.7.

6) Shibayama H, Saito Y, Tanimura A, Tanaka H, Matsumura I, Kanakura Y: A cell-death-defying factor, anamorsin, contributes cell growth through binding with PICOT and inactivation of PKCs and p38MAPK, The American Society of Hematology 52nd Annual meeting, Orlando, USA. 2010.12.

7) Satoh Y, Yokota T, Tanaka H, Kokame K, Miyata T, Matsumura I, Oritani K, Kanakura Y: A chromatin modifier SATB1 promotes lymphocyte production from primitive hematopoietic stem/progenitor cells, The American Society of Hematology 52nd Annual meeting, Orlando, USA. 2010.12.

8) Fujita J, Mizuki M, Otsuka M, Ezoe S, Tanaka H, Satoh Y, Fukushima K, Tokunaga M, Matsumura I, Kanakura Y: Myeloid neoplasm-related gene abnormalities differentially affect FLT3-ligand mediated dendritic cell differentiation from murine hematopoietic stem/progenitor cells, The American Society of Hematology 52nd Annual meeting, Orlando, USA. 2010.12.

9) 福島健太郎、 前田哲生、 野山知美、 高橋功、 高橋良、 松井崇浩、佐多弘、 南亮太、秋山正夫、 植田康敬、 田所誠司、柴田大、 松村到、 川瀬一郎、金倉譲：肺腺癌を合併した慢性骨髄性白血病に対する、Nilotinib・Gefitinib 併用の経験. 第 8 回日本臨床腫瘍学会学術集会. 2010.3.

10) 金倉譲：骨髄不全の診断と治療, 第 42 回日本内科学会 近畿生涯教育講演会. 大阪. 2010.6.

11) Fukushima K, Maeda T, Takahashi R, Sata H, Minami R, Kondoh Y, Ishibashi T, Ueda Y, Tadokoro S, Kijima T, Mizuki M, Kawase I, Kanakura Y: Combination therapy with Nilotinib and Gefitinib for adenocarcinoma of lung following chronic myelogenous leukemia. 第69回日本癌学会学術総会. 大阪. 2010.9.

12) Tanimura A, Tanaka H, Saito Y, Shibayama H, Matsumura I, Kanakura Y: Anti-apoptotic molecule Anamorsin is crucial for stromal function to support embryonic hematopoiesis. 第 72 回日本血液学会学術集会. 神奈川. 2010.9.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
   なし
2. 実用新案登録
   なし
3. その他
   なし

厚生労働科学研究費補助金（第３次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　佐々木　康綱　埼玉医科大学　医学部　腫瘍内科学　教授

研究要旨
がん診療の実態と自己負担および経済的負担感を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、埼玉医科大学国際医療センター腫瘍内科で診療中の消化器がん、乳がん、肺がんなどの固形がん 400 名を対象として実施した。結果については、現在研究代表者らが分析中である。また、大腸がんに対する２つの標準治療である、FOLFOX 療法と FOLFIRI 療法との医療経済的比較を行い、FILFIRI 療法がより経済的負担がかかることを明らかにした。

A.　研究目的

本研究では、消化器がん、乳がん、肺がんなどの固形がん 400 名を対象として患者のそれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用に関する調査を行った。また個別研究として埼玉医科大学国際医療センター開院以来大腸がんに対して FOLFOX 療法と FOLFIRI 療法を受けた患者における医療費を後方視的に比較した。

本研究から得られた成果は、わが国におけるがん診療の実態と、今後進めるべくがん医療施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。また大腸がん治療におけるレジメン選択の上でも有用な情報を与えることとなる。

B. 研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、埼玉医科大学国際医療センター腫瘍内科で診療中の消化器がん、乳がん、肺がんなどの固形がん 400 名を対象として実施した。使用調査票は、主任研究者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての感想や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010 年 9 月より埼玉医科大学国際医療センター倫理委員会の認可を受け、外来にて調査票を配布し、無記名で回答を求めた。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認された。

C. 研究結果

2011 年 1 月現在、調査継続中である。また、集計結果については研究代表者らにより分析中である。大腸がんに対するレジメンとしての FOLFOX 療法と FOLFIRI 療法の比較では、治療開始初期に於いて FOLFIRI 療法がより医療費を要することが明らかになった。

D. 考察

わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が強く望まれている。しかし、自己負担の実態はよく知られていない。今回の調査結果は、がん薬物治療等、医療政策に反映することが期待される。一方、大腸がんに対するレジメンを患者に提示する際の医療経済上の情報が明らかにされた。

E. 結論

埼玉医科大学国際医療センター腫瘍内科で診療中の消化器がん、乳がん、肺がんなどの固形がん400名を対象として「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を実施した。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Ajima H, Ogata H, Fujita K, Miwa K, Sunakawa Y, Mizuno K, Ishida H, Yamashita K, Nakayama H, Kawara K, Takahashi H, Sasaki Y: Clinical and economic evaluation of first-line chemotherapy with FOLFIRI or modified FOLFOX6 for metastatic colorectal cancer. Jpn J Clin Oncol. 40:634-638, 2010.

2) Hirose T, Fujita K, Nishimura K, Ishida H, Yamashita K, Sunakawa Y, Mizuno K, Miwa K, Nagashima F, Tanigawara Y, Adachi M, Sasaki Y: Pharmacokinetics of S-1 and CYP2A6 genotype in Japanese patients with advanced cancer. Oncol Rep. 524: 529, 2010.

3) Fujita K, Sugiyama M, Akiyama Y, Ando Y, Sasaki Y: The small-molecule tyrosine kinase inhibitor nilotinib is a potent noncompetitive inhibitor of the SN-38 glucuronidation by human UGT1A1. Cancer Chemother Pharmacol. 67:237-241, 2011.

4) Yamashita K, Nagashima F, Fujita K, Yamamoto W, Endo H, Miya T, Narabayashi M, Kawara K, Akiyama Y, Ando Y, Ando M, Sasaki Y: Phase I/II study of FOLFIRI in Japanese patients with advanced colorectal cancer. Jpn J Clin Oncol. Oct 21. [Epub ahead of print] 2010.

5) Sunakawa Y, Ichikawa W, Fujita K, Nagashima F, Ishida H, Yamashita K, Mizuno K, Miwa K, Kawara K, Akiyama Y, Araki K, Yamamoto W, Miya T, Narabayashi M, Ando Y, Hirose T, Saji S, Sasaki Y: UGT1A1*1/*28 and *1/*6 genotypes have no effects on the efficacy and toxicity of FOLFIRI in Japanese patients with advanced colorectal cancer. Cancer Chemother Pharmacol. Oct 19. [Epub ahead of print] 2010.

6) Fujita K, Sunakawa Y, Miwa K, Akiyama Y, Sugiyama M, Kawara K, Ishida H, Yamashita K, Mizuno K, Saji S, Ichikawa W, Yamamoto W, Nagashima F, Miya T, Narabayashi M, Ando Y, Hirose T, Sasaki Y: Delayed elimination of SN-38 in cancer patients with severe renal failure requiring dialysis who receive irinotecan. Drug Metab Dispos. 39:161-164, 2011.

7) Ishida H, Fujita K, Akiyama Y, Sunakawa Y, Yamashita K, Mizuno K, Miwa K, Kawara K, Ichikawa W, Ando Y, Saji S, Sasaki Y: Regimen selection for first-line FOLFIRI and FOLFOX based on UGT1A1 genotype and physical background is feasible in Japanese patients with advanced colorectal cancer. Jpn J Clin Oncol. in press 2011.

8) Sugiyama M, Fujita K, Murayama N, Akiyama Y, Yamazaki H, Sasaki Y: Sorafenib and sunitinib, two anti-cancer drugs, inhibit CYP3A4- and activate CYP3A5-mediated midazolam 1'-hydroxylation. Drug Metab Dispos. Jan 25. 2011.

2. 学会発表

1) Saji S, Sasaki Y : Toward the

personalized treatment with endocrine therapy for bseast cancer, 69th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association（第 69 回日本癌学会学術総会）OSAKA. 2010.9.

2) 砂川優、市川度、藤田健一、山下啓史、石田博雄、塩澤健、横山太郎、河原香織、秋山祐子、山本亘、三輪啓介、佐治重衡、佐々木康綱：UGT1A1*1/*28, *1/*6 遺伝子多型がFOLFIRI療法の効果・毒性に与える影響. 第48回日本癌治療学会総. 横浜. 2010.10.

3) 佐治重衡、玉木秀子、井沢知子、上田宏、清水千佳子、上野直人、佐々木康綱： 乳癌外来化学療法における効果的でより簡便な治療を目指して （シンポジウム）第 48 回日本癌治療学会学術集会. 京都. 2010.10.

4) 藤田健一、砂川優、三輪啓介、秋山祐子、杉山美奈子、河原香織、石田博雄、山下啓史、水野圭子、佐治重衡、佐々木康綱：イリノテカンを投与した重篤な腎機能障害を有するがん患者におけるSN-38消失の遅延および好中球減少の遷延. 第 31 回日本臨床薬理学会. 京都. 2010.12.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
   なし
2. 実用新案登録
   なし
3. その他
   なし

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　執印　太郎　高知大学　医学部 泌尿器科学　教授

研究要旨
がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、腎臓癌、前立腺癌患者を対象として実施した。対象施設は7施設で、対象患者はそれらの施設で薬物療法を受けるがん患者300人である。
また、がん薬物療法を担当する臨床医にも調査を実施した。各調査結果については、研究者らが集計、分析中である。

A. 研究目的

本研究では、腎臓癌、前立腺癌などの患者のそれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用に関する調査を行った。

本研究から得られた成果は、わが国における泌尿器科がん診療の実態と、今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。

B. 研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、腎臓癌、前立腺癌患者を対象として実施した。

対象施設と調査票配布予定症例数は、高知大学医学部附属病院（内訳：腎臓癌30人、前立腺癌40人）、北海道大学大学院医学部附属病院（内訳：腎臓癌50人、前立腺癌50人）、大分大学医学部附属病院（内訳：腎臓癌10人、前立腺癌10人）、横浜市立大学医学部附属病院（内訳：腎臓癌20人、前立腺癌20人）、高知医療センター（内訳：腎臓癌10人、前立腺癌10人）、名古屋大学医学部附属病院（内訳：腎臓癌20人、前立腺癌20人）、呉医療センター・中国がんセンター（内訳：腎臓癌5人、前立腺癌5人）、である。

使用調査票は、研究代表者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての自由記述や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010年9月より倫理委員会の認可を受けた施設において、外来で配布する形で調査を実施中である。

また、がん薬物療法を担当する医師15名にも、経済的な理由で治療を断念、途中打ち切り、変更下患者の事例などの実態について調査を行った。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認された。

C. 研究結果

2011年1月現在、調査継続中である。また、結果については研究代表者らにより集計、分析中である。

D. 考察

わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が強く望まれている。しかし、自己負担の実態は必ずしも知られていない。今回の調査結果は、泌尿器科領域のがん薬物治療等、医療政策に反映することが期待される。

E. 結論

全国7施設で治療を受けている腎臓癌、前立腺癌患者 300 人を対象として、がん薬物治療に関する実態等の調査を行った。また、上記施設の泌尿器科医 15 名に対して、薬物治療に関する調査を実施した。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Tamura K, Nishimori I, Ito T, Yamasaki I, Igarashi H, Shuin T : Diagnosis and management of pancreatic neuroendocrine tumor in von Hippel-Lindau disease. World J Gastroenterol. 16(36):4515-8, 2010.

2) Inoue K, Karashima T, Iiyama T, Ashida S, Kamada M, Shuin T, Rao P, Kurabayashi A, Furihata M, Hotta A : Pathobiological influence of a radiofrequency ablation system. Pathobiology. 77(2):64-77, 2010.

3) 福原秀雄、田村賢司、山崎一郎、鎌田雅行、西川宏志、松本学、井上啓史、執印太郎：G-CSF 産生腎盂扁平上皮癌の1例. 泌尿器科紀要. 56(9)：505-508, 2010.

4) 深田聡、辛島尚、戸井慎、黒田直人、執印太郎：横紋筋肉腫様細胞を伴った腎細胞癌の1例. 泌尿器科紀要. 56(4)：221-223, 2010.

5) 福原秀雄、井上啓史、濱口卓也、久野貴平、大河内寿夫、深田聡、辛島尚、鎌田雅行、執印太郎、阪倉直樹、笠原高太郎、渡邊裕修、香西哲夫、安田雅春、片岡真一、谷村正信、倉林 睦、降幡 睦夫：膀胱癌 115 例における光線力学的診断（PDD）の診断精. 日本レーザー医学会誌. 30(4)：387-393, 2010.

6) 田村賢司、執印太郎：mTOR 阻害剤と転移性腎細胞がん治療の進化. Mebio. 25(5)：6-11, 2010.

2. 学会発表

1) 福原秀雄、井上啓史、濱口卓也、久野貴平、大河内寿夫、深田聡、辛島尚、鎌田雅行、執印太郎、阪倉直樹、笠原高太郎、渡邊裕修、香西哲夫、安田雅春、片岡真一、谷村正信、倉林睦、降幡睦夫：ALA を用いた光力学診断(PDD)による膀胱癌 115 例の検討. 第 31 回日本レーザー医学会総会. 愛知. 2010. 11.

2) 亀井麻依子、福原秀雄、佐竹宏文、松本学、辛島尚、山崎一郎、西川宏志、鎌田雅行、井上啓史、弘井誠、執印太郎：異時性両側精巣腫瘍の1例. 第 62 回日本泌尿器科学会西日本総会. 鹿児島. 2010. 11.

3) 福原秀雄、深田聡、辛島尚、井上啓史、執印太郎：両側副腎転移を来たした原発不明癌の1例. 第 62 回日本泌尿器科学会西日本総会. 鹿児島. 2010. 11.

4) 田村賢司、山崎一郎、蘆田真吾、島本力、庵地孝嗣、福原秀雄、久野貴平、辛島尚、井上啓史、執印太郎、刈谷真爾、小川恭弘：再燃後に集学的治療により良好な治療経過を得ているハイリスク前立腺癌の2例. 第 48 回日本癌治療学会学術集会. 京都. 2010. 10.

5) 小原航、角田卓也、吉田浩二、岩崎一洋、高田亮、執印太郎、中村祐輔、藤岡知昭：腎癌に対する新規腫瘍抗原 HIG2 を標的とした癌ペプチドワクチン療法. 第 48 回日本癌治療学会学術集会. 京都. 2010. 10.

6) 鎌田雅行、川田千明、辛島尚、井上啓史、執印太郎、ME Gleave：Hsp27 アンチセンスは腎細胞癌に対するソラフェニブの抗腫

瘍効果を増強する、第98回日本泌尿器科学会総会. 岩手. 2010. 4.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　曽根　三郎　徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部 教授

研究要旨

がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、乳がん、消化器がん（胃、大腸、他）、肺がん、泌尿器科がん、血液がん、婦人科がん患者のうち薬物療法を受けている患者を対象として実施した。徳島大学病院他 14 施設で薬物治療受けるがん患者 1,500 人にアンケート配布した。同時に、がん薬物治療を担当する臨床医 150 人に調査を実施した。

集計結果については、現在研究代表者らが分析中である。

A. 研究目的

本研究では、乳がん、消化器がんなどの患者を対象としてそれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用等に関する調査を行った。

本研究から得られた成果は、わが国におけるがん診療の実態と、今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。

B. 研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、乳がん、消化器がん（胃、大腸、他）、肺がん、血液がん、婦人科がん、泌尿器科がん患者を対象として実施した。

対象施設と調査票配布予定症例数は、徳島大学病院 680 人（肺、消化器、泌尿器、血液、婦人科、乳腺）、徳島県立中央病院 40 人（肺、血液）、徳島市民病院 40 人（肺、血液）、徳島赤十字病院 70 人（婦人科、血液）、とくしまブレストケアクリニック 20 人（乳腺）、高松赤十字病院 220 人（肺、泌尿器）、松山赤十字病院 20 人（肺）、愛媛県立中央病院 50 人（泌尿器）、四国がんセンター100 人（泌尿器）、高知赤十字病院 10 人（肺）、国立病院機構高知病院 40 人（肺）、高知医療センター80 人（肺、乳腺）、大阪医療センター30 人（肺）、金沢大学付属病院がん高度先進治療センター100 人（肺、消化器、他）である。

使用調査票は、研究者代表者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての自由記載や、がん診療の自己負担軽減のために希望することなどをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。2010 年 9 月より倫理委員会の認可を受けた施設において、外来および入院病棟で配布する形で調査を継続実施中である。

また、2010 年 11 月より患者アンケート配布を実施している医療機関において、薬物療法を担当する医師向けにアンケートを実施。経済的事由で治療を中止・変更した事例の報告や、がん医療の医療経済的な説明の程度などについて調査した。対象医師数は 150 人である。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認後実施された。

C. 研究結果

2011 年 1 月現在、患者調査を継続中である。また、集計結果については研究代表者らにより分析中である。

D. 考察

わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が強く望まれている。しかし、自己負担の実態はよく知られていない。今回の調査結果は、がん薬物治療等、がんの医療政策に反映することが期待される。

E. 結論

現在薬物治療を受けている、乳がん、消化器がん、肺がん、婦人科がん、血液がん、泌尿器科がん患者のうち、徳島大学病院およびその研究協力医療機関で 1,500 人を対象として、がん薬物治療に関する実態等の調査を行った。同時に医師 150 人に対するアンケート調査を行った。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Donev IS, Wang W, Yamada T, Li Q, Takeuchi S, Matsumoto K, Yamori T, Nishioka Y, Sone S, Yano S : Transient PI3K inhibition induces apoptosis and overcomes HGF-mediated resistance to EGFR-TKIs in EGFR mutant lung cancer. Clin Cancer Res (in press)

2) Van TT, Hanibuchi M, Kakiuchi S, Sato S, Kuramoto T, Goto H, Mitsuhashi A, Nishioka Y, Akiyama SI, Sone S : The therapeutic efficacy of S-1 against orthotopically implanted human pleural mesothelioma cells in severe combined immunodeficient mice. Cancer Chemother Pharmacol. (in press)

3) Yano S, Li Q, Wang W, Yamada T, Takeuchi S, Nakataki E, Ogino H, Goto H, Nishioka Y, Sone S : Antiangiogenic therapies for malignant pleural mesothelioma. Front Biosci. 16: 740-748, 2011.

4) Nishioka Y, Aono Y, Sone S : Role of tyrosine kinase inhibitors in tumor immunology. Immunotherapy. 3(1): 107-116, 2011.

5) Kanematsu T, Hanibuchi M, Tomimoto H, Sakiyakma S, Kenzaki K, Kondo K, Bando H, Haku T, Yoneda K, Hirose T, Toyoda Y, Goto H, Sakaguchi S, Kinoshita K, Azuma M, Kakiuchi S, Kishi J, Azuma M, Tada H, Sumitomo M, Nishioka Y, Yano S, Sone S : Epidemiological and clinical features of lung cancer patients from 1999 to 2009 in Tokushima Prefecture of Japan. J Med Invest. 57(3-4): 326-333, 2010.

6) Sakaguchi S, Goto H, Hanibuchi M, Otsuka S, Ogino H, Kakiuchi S, Uehara H, Yano S, Nishioka Y, Sone S : Gender difference in bone metastasis of human small cell lung cancer, SBC-5 cells in natural killer-cell depleted severe combined immunodeficient mice. Clin Exp Metastasis. 27(5): 351-359, 2010.

7) Takeuchi S, Takahashi A, Motoi N, Yoshimoto S, Tajima T, Yamakoshi K, Hirao A, Yanagi S, Fukami K, Ishikawa Y, Sone S, Hara E, Ohtani N: Intrinsic cooperation between p16INK4a and p21Waf1/Cip1 in the onset of cellular senescence and tumor suppression In vivo. Cancer Res. 70(22): 9381-9390, 2010.

8) Yamada T, Matsumoto K, Wang W, Li Q, Nishioka Y, Sekido Y, Sone S, Yano S: Hepatocyte growth factor reduces

susceptibility to an irreversible epidermal growth factor receptor inhibitor in EGFR-T790M mutant lung cancer. Clin Cancer Res. 16(1): 174-183, 2010.
9) 曽根三郎：肺がん分子標的治療の基礎と臨床．日本内科学会雑誌． 99：2036-2051, 2010.
10) 曽根三郎：分子標的薬治療の歴史．日本臨床． 68：1787-1795, 2010.
11) 監崎孝一郎、 先山正二、 富本英樹、鳥羽博明、 中川靖士、 滝沢宏光、近藤和也、曽根三郎、 丹黒章：高齢者原発性肺癌における臨床的検討．胸部外科．63: 519-526, 2010.
12) 曽根三郎、倉本卓哉、佐藤正大、三橋惇志、柿内聡司、後東久嗣、多田浩也、西岡安彦：がん分子標的治療．日本臨床． 68: 997-1006, 2010.
13) 埴淵昌毅、柿内聡司、 佐藤正大、 曽根三郎：癌の浸潤・転移における分子メカニズムと標的分子．呼吸器内科． 17:212-219, 2010.
14) 後東久嗣、曽根三郎：新薬の最近の話題 アバスチン（ベバシズマブ）－非小細胞癌に対する新しい治療薬．分子呼吸器病．14: 59-62, 2010.

2. 学会発表

1) 曽根三郎:肺癌の進展機構と分子標的治療．第 107 回日本内科学会． 東京, 2010.4.
2) 富本英樹、後東久嗣、多田浩也、西岡安彦、大串文隆、土居裕幸、山本晃義、竹内栄治、兼松貴則、曽根三郎：進行非小細胞肺癌患者を対象とした TS-1/CDDP 併用療法の臨床第 II 相試験．第 107 回日本内科学会．東京．2010.4.
3) 曽根三郎：がん転移制御と分子標的治療．第 19 回日本がん転移学会学術集会． 金沢．2010.6.
4) 曽根三郎：肺がん．第 48 回日本癌治療学会学術集会．京都．2010.10.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　武井　寛幸　埼玉県立がんセンター　乳腺外科　部長

研究要旨

がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、乳がん患者を対象として実施した。対象施設は9施設で、対象患者はそれらの施設で薬物療法を受ける乳がん患者1500人である。また。薬物療法を担当する臨床医25名に対しても調査を実施した。

各々の医療機関の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した。結果については、現在研究者らが集計、分析中である。

A. 研究目的

本研究では、乳がん患者のそれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用に関する調査を行った。

本研究から得られた成果は、わが国におけるがん診療の実態と、今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。

B. 研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、乳がん患者1500名を対象として実施した。

対象施設は、埼玉県立がんセンター、さいたま赤十字病院、赤心堂病院、三井病院、春日部市立病院、二宮病院、伊奈病院、こう外科クリニックである。

使用調査票は、研究代表者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての感想や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010年9月より倫理委員会の認可を受け、各施設の外来で配布する形で調査を実施中である。

また、乳がん薬物療法担当医師25名に対して、経済的理由で治療を中止せざるを得なかった患者の実態について、アンケート調査を行った。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認後実施した。

C. 研究結果

2011年1月現在、調査継続中である。また、結果については研究代表者らにより集計、分析中である。

患者へのアンケートは直接手渡しで行い、本研究の主旨をよく話し、できるだけ正確に記入していいただくように努めた。

D. 考察

わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が強く望まれている。しかし、自己負担の実態はよく知られていない。今回の調査結果は、乳がんに対する薬物治療等、医療政策に反映することが期待される。

E. 結論

埼玉県内の 9 施設で治療を受けている乳がん患者 1500 人を対象として、がん薬物治療に関する費用負担等の実態等の調査を行った。

また、乳がん薬物療法担当医師 25 名を対象に、経済的理由で中止せざるを得なかった患者の実態等についての調査を行った。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Toi M, Saji S, Masuda N, Kuroi K, Sato N, Takei H, Yamamoto Y, Ohno S, Yamashita H, Hisamatsu K, Aogi K, Iwata H, Takada M, Ueno T, Saji S, Chanplakorn N, Suzuki T, Sasano H: Ki67 index changes, pathological response and clinical benefits in primary breast cancers patients treated with 24 weeks aromatase inhibition. Cancer Sci. 2011 (in press)

2) Masuda N, Iwata H, Rai Y, Anan K, Takeuchi T, Kohno N, Takei H, Yanagita Y, Noguchi S: Monthly versus 3-monthly goserelin acetate treatment in pre-menopausal patients with estrogen receptor-positive early breast cancer. Breast Cancer Res Treat. 2011 (in press).

3) Takei H, Kurosumi M, Yoshida T, Hayashi Y, Higuchi T, Uchida S, Ninomiya J, Oba H, Inoue K, Nagai S, Tabei T: Neoadjuvant endocrine therapy of breast cancer: which patients would benefit and what are the advantages? Breast Cancer. 2010 (in press)

4) Yoshida T, Takei H, Kurosumi M, Ninomiya J, Ishikawa Y, Hayashi Y, Tozuka K, Oba H, Kawanowa K, Inoue K, Tabei T. True recurrences and new primary tumors have different clinical features in invasive breast cancer patients with ipsilateral breast tumor relapse after breast-conserving treatment. Breast J. 16:127-33, 2010.

5) Omoto Y, Kurosumi M, Hozumi Y, Oba H, Kawanowa K, Takei H, Yasuda Y: Immunohistochemical assessment of primary breast tumors and metachronous brain metastases, with particular regard to differences in the expression of biological markers and prognosis. Experimental and Therapeutic Medicine. 1: 561-567, 2010.

6) Takei H, Kurosumi M, Yoshida T, Ishikawa Y, Hayashi Y, Ninomiya J, Tozuka K, Oba H, Inoue K, Nagai S, Saito Y, Kazumoto T, Saitoh JI, Tabei T: Axillary lymph node dissection can be avoided in women with breast cancer with intraoperative, false-negative sentinel lymph node biopsies. Breast Cancer. 17:9-16, 2010.

7) 山本尚人、田部井敏夫、井上賢一、武井寛幸、佐藤信昭、柳田康弘、藤澤知己、藤井博文、佐伯俊昭、黒住昌史：腋窩リンパ節転移陰性乳がんに対する術後補助化学療法としてのDocetaxelとCyclophosphamideの忍容性および安全性-JECBC04 試験-. 癌と化学療法. 37:57-63, 2010.

2. 学会発表

1) 武井寛幸、吉田崇、林祐二、樋口徹、内田紗弥香、齊藤喬、安嶋康治、黒住昌史、井上賢一、永井成勲、田部井敏夫：非浸潤性乳管癌に対する同時乳房再建を伴う乳房切除術の検討. 第 35 回日本外科系連合学会学術総会. パネルディスカッション 5「非浸潤性乳管癌 (DCIS) の診断と治療」. 東京. 2010.6.

2) 内田紗弥香、武井寛幸、吉田崇、林祐二、樋口徹、二宮淳、井上賢一、永井成勲、黒住昌史、大庭華子、田部井敏夫：乳癌における緑茶摂取と臨床病理学的因子との関連性.第48回日本癌治療学会学術集会. 京都. 2010.10.

3) 武井寛幸、吉田崇、林祐二、樋口徹、内田紗弥香、二宮淳、井上賢一、永井成勲、黒住昌史、大庭華子、田部井敏夫：乳癌の乳房内再発における2nd sentinel lymph node biopsy の意義. 第48回日本癌治療学会学術集会.京都. 2010.10.

4) 林祐二、内田紗弥香、樋口徹、吉田崇、武井寛幸、井上賢一、永井成勲、黒住昌史、田部井敏夫：乳癌検診精査への Vacuume Assisted Biopsy(VAB)導入に伴う初期投資費用の回収期間について. 第 20 回日本乳癌検診学会総会. 福岡. 2010.11.

5) 林祐二、樋口徹、石川裕子、吉田崇、永井成勲、井上賢一、大庭華子、武井寛幸、黒住昌史、田部井敏夫：当センターにおける診療コストを考慮した乳腺穿刺生検の選択についての考察. 第 18 回日本乳癌学会学術総会. 札幌. 2010.6.

6) 樋口徹、武井寛幸、吉田崇、石川裕子、林祐二、二宮淳、黒住昌史、大庭華子、井上賢一、永井成勲、田部井敏夫：家族性乳癌の内分泌的環境の特徴. 第 18 回日本乳癌学会学術総会. 札幌. 2010.6.

7) 井上賢一、永井成勲、樋口　徹、林祐二、石川裕子、吉田崇、武井寛幸、大庭華子、黒住昌史、田部井敏夫：ホルモン受容体陽性、HER2 蛋白過剰発現乳がんに対する内分泌、trastuzumab と化学療法併用療法の効果. 第18回日本乳癌学会学術総会. 札幌. 2010.6.

8) 永井成勲、井上賢一、樋口徹、石川裕子、林祐二、吉田崇、武井寛幸、大庭華子黒住昌史、田部井敏夫：HER2 陽性乳癌に対する Lapatinib＋Capecitabine の有用性. 第18回日本乳癌学会学術総会. 札幌. 2010.6.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
   なし
2. 実用新案登録
   なし
3. その他
   なし

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　直江知樹　名古屋大学大学院医学系研究科　血液・腫瘍内科学　教授

研究要旨

がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を造血系腫瘍患者を対象として実施した。対象施設はJALSG(日本成人白血病治療共同研究グループ)参加施設21で、対象患者はそれらの施設で薬物療法を受けるがん患者924人である。また、血液内科でがん診療に従事している臨床医200人を対象としたアンケートも実施した。各々の医療機関の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した。結果については、現在研究者らが集計・分析中である。

A. 研究目的

本研究では、慢性骨髄性白血病などの造血系腫瘍患者のこれまでに受けた薬物治療の実態と、患者自己負担費用等に関する調査を行った。本研究から得られる成果は、わが国におけるがん診療の実態、とりわけ長期負担が問題とされる慢性骨髄性白血病等造血系腫瘍に関して今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。

最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれるがん制度改革についての提言が可能となると期待される。

B. 研究方法

「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を慢性骨髄性白血病など造血系腫瘍患者を対象として実施した。

対象は、JALSG（日本成人白血病治療共同研究グループ）に参加の21施設（東京都立駒込病院血液内科、国立病院機構水戸医療センター、山梨県立中央病院化学療法科、札幌北楡病院内科、都立大塚病院輸血科、兵庫県立がんセンター血液内科、JA静岡厚生連遠州病院内科、埼玉医科大学国際医療センター造血器腫瘍科、名古屋大学血液・腫瘍内科、PL病院血液内科、日本大学医学部付属練馬光が丘病院内科、国立病院機構長崎医療センター血液内科 NTT西日本九州病院血液内科、聖マリアンナ医科大学血液・腫瘍内科、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院血液・腫瘍内科、長崎大学原研内科、浜松医科大学血液内科、藤田保健衛生大学医学部血液・化学療法科、NTT東日本九州病院血液内科、宮城県立がんセンター血液内科、豊田厚生病院血液内科）で、調査表配布予定症例数は、計924である。

使用調査票は、主任研究者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての感想や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010年9月より倫理委員会の許可を受けた施設において外来および入院病棟で配布する形で調査を実施した。

また、造血系腫瘍患者の診療に従事しているJALSG参加施設の血液内科医師計200人を対象として、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を実施した。がん患者の経済的負担についての説明方法や、負担軽減のために優先させている事項、経済的理由によって治療

の変更・中止となった症例事例を問うた質問項目などで構成されている。
(倫理面への配慮)
厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行った。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および各施設の倫理審査を受け、承認後実施している。

C. 研究結果
2011 年 1 月現在、患者調査を継続中である。また、結果については研究代表者により集計・分析中である。

D. 考察
わが国のがん医療においては、費用に見合ったアウトカムの改善が望まれている。しかし、自己負担等の実態はよく知られていない。今回の調査結果は、とりわけ長期負担が問題とされる慢性骨髄性白血病等造血系腫瘍に関して、薬物治療等、医療政策に反映することが期待される。

E. 結論
全国 21 施設で治療を受けている慢性骨髄性白血病など造血系腫瘍患者 924 人、および診療に携わっている医師 200 人を対象として、がん薬物治療に関する実態等の調査を行った。

F. 研究発表
1. 論文発表

1) Nagai T, Takeuchi J, Dobashi N, Kanakura Y, Taniguchi S, Ezaki K, Nakaseko C, Hiraoka A, Okada M, Miyazaki Y, Notoji T, Higashihara M, Tsukamoto N, Kiyoi H, Nakao s, Shingawa K, Ohno R, Naoe T, Ohnishi K, Usui N: Imatinib for newly diagnosed chronic-phase chronic myeloid leukemia : result of a prospective study in Japan. Int J Hematol. 92(1):111-7, 2010.
2) Ohtake S, Miyawaki S, Kiyoi H, Miyazaki Y, Okumura H, Matsuda S, Nagai T, Kishimoto Y, Okada M, Takahashi M, Handa H, Takeuchi J, Kageyama S, Asou N, Yagasaki F, Maeda Y, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R: Randomized trial of response-oriented individualized versus fixed-schedule induction chemotherapy with idarubicin and cytarabine in adult acute myeloid leukemia: the JALSG AML95 study. Int J Hematol. 91(2):276-83, 2010.
3) Morita Y, Kanamaru A, Miyazaki Y, Imanishi D, Yagasaki F, Tanimoto M, Kuriyama K, Kobayashi T, Imoto S, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R: Comparative analysis of remission induction therapy for high-risk MDS and AML progressed from MDS in the MDS200 study of Japan Adult Leukemia Study Group. Int J Hematol. 91(1):97-103, 2010.
4) Döner H, Estey E.H, Amadori S, Appelbaum F.R, Buchner T, Burnett A. K, Dombret H, Fenaux P, Gremxade D, Larson R. A, Coco F.Lo, Naoe T, Niederwieser D, Ossenkoppele G. J, Sanz M.A, Sierra J, Tallman M.S, Lowenberg B, Bloomfield C. D: Diagonosis and management of acute myeloie leukemia in adults : recommendations from an international expert panes, on behalf of the European LeukemiaNet. Blood. 115(3):453-74, 2010

2. 学会発表

1) Nakaseko C, and Naoe T, et al. : Sustained Superior Long-Term Outcomes of Imatinib Therapy In Japanese Patients with Newly Diagnosed Chronic Myelogenous Leukemia In Chronic Phase: Sub-Analysis According to the Mean Daily Dose of Imanitib and the Plasma Trough Levels In JALSG CML202 After 66 Months Follow-up (Poster Session) 52th American Society of Hematology annual meeting, Orland. 2010.12

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

がんの医療経済的な解析を踏まえた患者負担の在り方に関する研究

研究分担者　古瀬　純司　杏林大学医学部 内科学腫瘍内科　教授

研究要旨
がん診療の実態と自己負担等を調査する目的で、「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、消化器がん（胃、大腸、膵、胆道、肝臓、食道）、肺がん、乳がん、脳腫瘍、原発不明がんの患者およびその担当医師を対象として実施した。対象は杏林大学医学部付属病院6診療科において、薬物療法を受けるがん患者500名、および担当医師10名である。当施設の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した。結果については、現在研究代表者らが集計・分析中である。

A. 研究目的

本研究では、消化器がん（胃、大腸、膵、胆道、肝臓、食道）、肺がん、乳がん、脳腫瘍などの患者のそれまでに受けた薬物治療の実態と、かけた費用に関する患者調査および担当医師に対する調査を行った。

本研究から得られた成果は、わが国におけるがん診療の実態と、今後進めるべく施策の基本となるデータを提供できる。最終的には、社会および個人の負担を最小化するため臨床現場で可能な対策、現行制度の運用上の工夫、望まれる制度改革についての提言が可能となると期待される。

B. 研究方法

①患者対象調査「がん診療の経済的な負担に関するアンケート調査」を、消化器がん（胃、大腸、膵、胆道、肝臓、食道）、肺がん、乳がん、脳腫瘍、原発不明がん患者を対象として実施した。

対象施設と調査票配布予定症例数は、腫瘍内科　300名、呼吸器内科・外科100名、乳腺外科50名、消化器外科30名、脳外科20名である。

使用調査票は、主任研究者らが開発したもので、受けたがん治療の履歴、かけた費用、自己負担についての感想や、がん診療の自己負担軽減のために何が必要か、などをがん種別に問うた質問項目などで構成されている。

2010年9月、本学倫理委員会の認可を受け、外来で配布する形で調査を実施した。

（倫理面への配慮）

厚生労働省「疫学研究の倫理指針」、「臨床研究に関する倫理指針」に基づいて行なった。患者のプライバシーを保護するために、調査票および返信用封筒には個人を特定できる情報は含まれていない。また、本研究は、東北大学倫理委員会の審査および杏林大学医学部の倫理審査を受け、承認されている。

②担当医師対象調査

上記疾患の薬物療法を担当する医師 10 名を対象として調査を実施した。医師調査の調査項目は、担当患者数、がん医療費に関する説明の程度、経済的な相談、経済的な理由で治療を変更、中止した患者の事例、患者負担最小化への解決策等である。

C. 研究結果

2011年1月現在、調査継続中である。また、結果については研究代表者らにより分析中である。